

慢性疼痛診療システムの均てん化と
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 小杉 志都子 慶應義塾大学医学部 専任講師

研究要旨

本研究は、他施設と協力して、難治性疼痛および慢性痛に対する学際的医療の介入効果を多面的に定量することも目的とした。また、慢性疼痛診療の均てん化を図る目的で慢性疼痛診療ガイドラインを作成した。

A. 研究目的

慢性の難治性疼痛に対する学際的医療の有効性を明らかにするために、当施設痛みセンターにおける難治性疼痛および慢性痛に対する学際的医療の介入効果を多面的に定量することを目的とした。また、慢性疼痛診療ガイドラインの作成に参加した。

B. 研究方法

選択基準: 慶應義塾大学病院痛み診療センターを受診した10歳以上の患者。

方法: 従来の臨床診療で用いられている疼痛、健康関連の生活の質、心理面、日常生活動作に関する問診 (brief pain inventory :BPI、Pain Disability Assessment Scale: PDAS、Hospital Anxiety and Depression Scale: HADS、Pain Catastrophizing Scale: PCS、Pain Self-Efficacy Questionnaire: PSEQ、EuroQol-5D:EQ-5D、アテネ不眠尺度、Zarit 介護負担尺度、医療保険点数、ロコモ25) について、初診時・3か月・6か月後に施行された結果を解析する。

本研究は、慶應義塾大学医学部倫理委員会の承認を得ている。

C. 研究結果

多職種による治療介入（運動療法・マインドフルネス）により、身体機能・心理社会的機能の改善効果は得られた。

D. 考察

難治性慢性痛患者に対して身体および精神

の両側面から介入により、早期の段階での疼痛および関連する心理の改善が期待される。一方で、学際的医療の非介入群との比較ができていないのが現状である。今後、多変量解析を要す。

E. 結論

慢性の難治性疼痛に対して、学際的医療の有効性が示唆されたが、データの蓄積によるさらなる解析を要す。また、慢性疼痛診療ガイドラインにより本邦の慢性疼痛診療の均てん化が期待される。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 篠原佑太、小杉志都子. 他「複合性局所疼痛症候群 (CRPS) に対し、脊髄刺激療法 (SCS) と理学療法による複合的治療が奏功した1症例」The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 2020. 57:558-64
2. Tanaka.C, Kosugi S, et al. The association of work performance and interoceptive awareness of “body trusting” in an occupational setting: a cross-sectional study. BMJ open 2021 in press.

2. 学会発表

1. 小杉志都子：手術・侵襲的治療の効果と問題点」-脊髄刺激療法の適応とその効果-。第13回日本運動器疼痛学会オンライン集会, 2020. 12月
2. 小杉志都子：脳機能画像による慢性痛の評価：どこまで分かったか-安静時fMRIから慢性痛の指標を読み解く-。第54回日本ペインクリニック学会オンライン集会, 2020. 11月
3. 小杉志都子：脊椎刺激療法による運動器疼痛マネジメント-難治性疼痛に対する新しい刺激法。第93回日本整形外科学会オンライン学術総会, 2020. 5月

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし